小島友実の

あの馬のSTORY

ハーツコンチェルト

トレセンの馬房にて。ハーツコンチェルトと武井調教師

デビュー前から管理する武井亮調教師の期待が高かったハーツコンチェルト。今回、約2年ぶりにこの馬の事をじっくり伺わせて頂きました。3歳から4歳にかけてのレースと現在の状況、そして今後について色々と教えて頂きましたよ。

武井調教師はハーツコンチェルトがデビューする前から、「この馬はクラシックに出走させなければならないほどの可能性を感じる」と明言。そして実際、日本ダービー3着、菊花賞6着。日本ダービーは0.1秒の3着で、私も直線は大声を出して声援を送った事を覚えています。

「青葉賞からダービーのローテーションはきついと言われますが、ダービーに向けてのハーツコンチェルトは状態が良くなっていました。結果は3着。改めて、能力を感じました。限られた状況下で最高の状態で出走できた事を馬やスタッフに感謝していますし、松山弘平騎手が馬の力を引き出してくれました。ただ、若葉賞をしっかり勝って皐月賞に出走していれば、もっと余裕をもってダービーに出走できていたかもしれません。だから、手放しで良かったとは思えないです」

神戸新聞杯をステップに出走した菊花賞は6着。「勝負所で後続馬にトモを引っかけられてバランスを崩すなど、不運が重なっていました」と振り返ります。

4歳初戦の日経新春杯は4着でした。「ハンデは55キロで、これは負けないだろうと思っていたら、伸びませんでした。このあたりから、ハーツコンチェルトは本気で走っていないのかもしれない、と感じるようになりました」

その後はサウジアラビアへ遠征し、ネオムターフCは11着。帰国後に出走した六社Sでは、サウジアラビアのレースに続き騎乗したモレイラ騎手の進言で、初めてブリンカーを着用しました。

「この時は帰国初戦で状態はそこまで良くなかったんです。それでも期待していたのですが、4着。勝ち馬は能力の高い馬ですから、仕方がない面もあったのかなと思っています」

続いてのジューンSではブリンカーを外し、結果は2着でした。

「この時は状態が上がっていたので、大丈夫だろうと思っていたら、負けてしまって…。勝ち馬との4キロ差が響いた印象もあります。それにしても、もどかしいレースが続いていると感じています」

このレースの後に右後肢種子骨に骨片が見つかり、7月に北海道の社台クリニックで除去手術。術後は順調に回復し、昨年12月20日に美浦トレセンへ帰厩しました。今年1月8日、馬房にいるハーツコンチェルトに会ってきましたよ。

「1月8日の段階で530キロくらい。見た目は太いけど、乗った感じは太目感はないです。息使いは良くて、心拍数の値も4歳時と同等で良いです」

5歳になったハーツコンチェルトの能力を師はどう評価しているのでしょう。

「今でもG1レベルの馬だと思っています。少なくとも重賞は勝てる。ポテンシャルとしては、アーバンシックと同じくらいの評価です。ただ現状、ハーツコンチェルトはレースで全能力を出す走りができていない。前走のジューンSも、伸びないなと思う所から少しずつ伸びていた。エンジンのかかりが遅いんです。僕はこの要因を気持ちの問題だと思っています。というのも、坂路での調教では乗り手の指示に反応できている。でもコースでの調教やレースでは反応が遅い。前走では調教で乗ってもらった菅原明良騎手が『ブリンカーは要らないです』と言っていたので外しましたが、次走（2月8日、3勝クラスの東京芝2400メートルに出走予定）はレースで乗る騎手に調教で乗ってもらった感触で、ブリンカーを着けるかどうかを決めます」

その次走の鞍上に決まった横山武騎手が1月16日、追い切りに初騎乗。師は、「横山騎手はこの馬のことをすごく気に入ってくれたし、『レースを楽しみにしていて下さい』と言ってくれたので、僕も楽しみにしています」と話していました。

最後にメッセージを頂きました。

「なかなか結果を出せず、申し訳なく思っています。それでも、走りのバランスの良さやトップスピードに乗った際の走りの迫力は相変わらず素晴らしいです。昨年12月に帰厩後、この血統特有のうるさい面が出てきていますが、母や姉を手掛けてきた経験があるので対応できています。しっかり結果を出せるよう頑張りますので、待っていてください」

ハーツコンチェルトはデビュー以降、姉のナスノシンフォニーもずっと手掛けていた新美望持ち乗り調教助手が担当。この血統を知り尽くしている皆さんが携わっているというのは心強いですよね。ハーツコンチェルトの今後が楽しみです。

（取材：1月8日&17日）

小島友実の

あの馬のSTORY

『馬房では扱いやすい』というプロピエダッド

プロピエダッド

今月の「この馬のSTORY」は特別版。武藤善則厩舎所属のプロピエダッドもご紹介します。この馬は2023年度1歳募集の特別提供馬だったので、注目されている方が多いのではないでしょうか。

グリーンファームのホームページのリポートにあったように、プロピエダッドは2歳の始め頃に種子骨炎を発症。その手術をした影響で調整が遅れましたが、その後は順調に回復。昨年11月20日に美浦トレセンへ初入厩しました。

「2023年の夏頃、この馬を初めて見た時はけっこうごつくて、使いながら良くなるタイプなのかなと思っていました。それが昨年11月に入ってきた際はお腹がスッキリして、メリハリのある馬体に変わっていましたね。ゲート試験もすぐに合格しました」

初戦に向けての調整はどうだったのでしょうか。

「調教の本数は足りないかもと感じましたが、2週連続で追い切りに乗ってくれた石川裕紀人騎手が『この馬は実戦タイプですね』と言っていましたからね。坂路で最後の1ハロン12秒台が出ていたし、能力はある。手応えを感じました」

そのデビュー戦は昨年12月21日の中山ダート1800メートル。結果は9着でした。

「初戦としては上々だったと思います。キックバックを受けながらも、ひるまず走っていました。3コーナーでインに入ってからの走りからは着はあるかなという感じ。あの追い上げる脚が持続すれば、次はステップアップできそうだとイメージできる内容でした」

1月8日。武藤師にプロピエダッドについてゆっくりお話を伺いました。長所や適性をどう感じているのでしょうか。

「特に坂路を駆け上がる時のフットワークと体の使い方が良いです。体に筋肉がしっかりあるし、ルヴァンスレーヴ産駒だから当面はダートでしょうね」

武藤調教師に、「ここが良くなればという点はありますか?」と聞くと、こんな答えが返ってきました。

「メンタルですね。デビュー前からその心配が少しあったので、初戦からメンコとネックストレッチを装着しています。その初戦の競馬場では装鞍所、パドック、返し馬、ゲートまでうるさい仕草は見せませんでしたけど…。初めてのレースで暴れる余裕がなかったのかもしれません。そして1戦経験し、テンションがより高くなってしまいました。馬房では扱いやすいのですが、調教の前後などに立ち上がる仕草を見せるんです（苦笑）。だから普段から慎重に対応しています」

この取材の後、1月13日の中山ダート1800メートルに出走したプロピエダッド。結果は15着でした。

「道中はスムーズに追走できていましたが、直線でスタミナが切れてしまいましたね。当日は思っていた以上に、テンション上がらずに競馬まで行けました。ただ、石川騎手からは『最後まで息が持ちませんでした。現状でやや距離が長いのかもしれません』との事でしたし、メンバーレベルは時計面からもかなり高かったと思います。この後は放牧に出て、今後は交流レースも視野に入れても良いのかなと考えています」

2戦目は残念ながら結果が出ませんでしたが、武藤調教師は引き続き、プロピエダッドに期待を寄せています。

「馬体のビジュアルを見る限り、半兄のアルニラム（現4歳）に負けていないと感じています。アルニラムは5戦目で勝ちあがって、昇級初戦が3着。だからプロピエダッドも気持ちと馬体のバランスが取れて条件が合えば、前進してくれるのではないでしょうか。2戦目は会員の皆様に残念な思いをさせてしまいましたが、直前追い切りで53秒台が出る馬ですから、変わってくると思います」

そして、目標については、このようにお話されていました。

「これまでグリーンファームさんで預からせて頂いた馬の中で、アドマニカ、ダンサーブロンド、レイヨンヴェールと、JRAで3勝した馬はすべて牝馬なんです。だからプロピエダッドでもぜひ3勝以上したいと思っています。そのためにもまずは初勝利を目指します。僕自身、この馬の素質を評価しているし、期待しています。この馬を持っている会員さんは多いと思いますから、厩舎スタッフ力を合わせて、牧場とも連携を取り、しっかりやっていきます。2歳で預けて頂いている馬（ジュリエットベールの23）も牝馬なんですよ。その馬に良い流れを引き継げるように、と思っています」

2戦目の後は放牧に出たプロピエダッド。牝馬と武藤厩舎の相性の良さを考えると、次走以降も目が離せませんよね。応援させて頂きます。

（取材：1月8日&14日）

profile 競馬キャスター&ライター。現在、ラジオNIKKEI「中央競馬実況中継」に出演中。「週刊競馬ブック」や「JRA-VANスマホアプリ」にて連載を持つ。ライフワークは馬場取材で、2024年「馬場のすべて教えます2（主婦の友社刊）」を出版。JRAの競馬場の他、最近は地方競馬場の馬場取材も行っている。